

第Ⅴ章 まとめ

第1節 旧石器時代について

本遺跡ではB区から旧石器時代の礫群、石器集中部等が検出された。下北方遺跡群では下郷遺跡のトレンチ1でナイフ形石器や剥片尖頭器、角錐状石器を含む石器84点が出土しており、本遺跡群におけるAT層上位の石器群としてはこれが2例目となる。1トレンチと2トレンチは地形的に独立した位置にあり、両者の石器群は出土層位に違いがあること、また両トレンチ間で接合関係が認められないことから、これらの石器群は別個の文化層の可能性が考えられる。出土石器群の様相をみると、2トレンチⅧ層上位出土の石器群は縦長剥片と小型ナイフ形石器主体であることから、大まかにはナイフ形石器の終末期、宮崎10段階編年の第7段階前後に位置付けられるものであろう。このことは小林降下軽石（Ⅷ層）直下という出土層位とも矛盾しない。一方、1トレンチⅨ層出土石器に含まれる製品類はスクレイパーを主体としたものであり、時期を検討する材料であるナイフ形石器や角錐状石器、瀬戸内技法といった典型的な石器類が含まれていない。AT層上位の第5～7段階のいずれかに属すると考えられるが、詳細な時期については不明と言わざるを得ない。したがってここでは、両トレンチ出土石器群が異なる時期の文化層である可能性を指摘するにとどめたい。

1トレンチ石器集中部で出土した接合資料には、素材となる自然礫から目的剥片まで作出するもの（①、③）と、石核あるいは素材剥片を作出し持ち出すもの（②）の2種類がある。接合資料②は自然面を除去した後の石核あるいは素材剥片となる部分が欠落していることから、遺跡外へ持ち出されたと考えられる。また、出土した敲石の重量は400gを越えており、石核調整や素材剥片剥離に用いられたものであろう。使用されている石器石材は頁岩を主体としわずかにホルンフェルスを含むものであり、大淀川下流域でみられる典型的な石材組成である。

今後は下郷遺跡や下郷第6遺跡（平成26年度本発掘調査）で出土した石器群との比較、あるいは地形的に連続性を持つ垂水台地の遺跡群との比較によって、下北方丘陵における旧石器時代の様相を明らかにしていく作業が必要であろう。

第2節 縄文時代早期について

本遺跡からはアカホヤ火山灰層下の暗褐色ローム層から集石遺構1基、打製石鏃等の遺物が少量出土した。しかし、土器の出土がなく詳細な時期については不明である。下北方遺跡群では、下郷遺跡や塚原第3遺跡等で押型文土器や塞ノ神式土器といった土器の出土がみられるが、いずれも少量で遺構に伴うものも少ない。縄文時代早期に本丘陵上で人間活動が営まれたことは確実であるが、その実態の解明は今後の課題といえよう。

第3節 古墳時代について

本遺跡では、A区から地下式横穴墓3基とそれに伴う副葬品が検出された。また、A区の柱穴や土坑にも古墳時代の遺物を含むものが少量ある。本遺跡の地下式横穴墓3基は、下北方丘陵における地下式横穴墓のうち「小型で平入りの玄室構造を持ち、副葬品が少ない一群」（西嶋

第4節 古代以降について

2010) に分類される。墳丘にも伴わないと考えられ、下北方丘陵における地下式横穴墓の中では妻入り構造で大型の地下式横穴墓よりも相対的に下位のランクに位置付けられる。副葬品については、地下式横穴墓1(23号)で鉄剣とガラス小玉が、地下式横穴墓2(24号)で珠文鏡と石製玉類が出土した一方で、地下式横穴墓3(25号)からは副葬品が出土していない。副葬品について個別にみていくと、23号墓出土鉄剣は把側面に板材をはめ込む溝を持ち、鞘受部を有するものである。豊島直博の把C類かD類に属するものと思われ、前期後半～中期の年代が考えられる。ガラス小玉は大賀克彦のBDⅡ類に分類でき、中期～後期前葉と考えられる。24号墓出土珠文鏡は、珠文2列に鋸歯文が施されるもので、珠文は比較的等間隔で揃っている。外区文様に鋸波文を用いないことから中期のものであろう。これらの遺物から23号墓と24号墓は概ね中期の時間幅に位置付けられるが、詳細な時期比定については今後の研究に委ねたい。

A区の北側に存在したとされる下北方15号墳は確認調査の結果消失していることが判明したが、A区で検出された地下式横穴墓や隣接する花切第1遺跡の土坑墓(5世紀後半)の存在から、周辺にも古墳時代の遺構が残存する可能性が考えられる。

第4節 古代以降について

本遺跡ではアカホヤ火山灰層上面で竪穴住居計32軒と溝状遺構12条、周溝墓1基、多数の柱穴や土坑が検出された。特に竪穴住居はA区、B区共に重複が激しい上、土質が類似していたことから遺構検出には困難が伴った。そのため遺跡情報として必要な記録が一部欠落してしまったことが悔やまれる。

本遺跡の竪穴住居群の時期であるが、出土遺物から全ての住居が8世紀後半～9世紀前半に属すると考えられる。竪穴住居はいずれも平面形が方形を基調としており、住居掘削の際に出た廃土を用いたと思われる貼床を有する点で構造上の共通性を持つ。また、大半のものは住居廃棄時に埋め戻されている。竪穴住居の火床にはカマド、土器埋設炉、地床炉があるが、火床をもたないものも多い。カマドはいずれも天井部～壁面が破壊されており、竪穴住居廃棄に伴ってカマドも取り壊されたと考えられる。土器埋設炉には土師器甕や甑の胴下半部、あるいは口縁部を打ち欠いたものを設置しており、竪穴住居1西側埋設炉のように複数の甕の破片を組み合わせたと考えられるものもある。土器埋設炉はいずれも貼床構築後に設置されている。

出土遺物を詳しくみると、甕には古墳時代からの系譜をもつ在地系甕と8世紀末～9世紀前葉に出現する回転台成形+内面ヘラケズリの土師器甕(44、50、66、164、202)、いわゆる豊後大分系企球型甕(43、51、85、240)の3種類が認められる。また、竪穴住居29内カマドに設置された甕(242)は、回転台成形で口縁部に強い回転ナデを、外面に縦位のヘラケズリを施し、内面は斜位のナデ調整されるもので、あまり類例をみない甕である。豊後大分系企球型甕は、8世紀後半～9世紀前半に豊後で生産され、広域流通品として日向国にもたらされた甕である。カマドや土器埋設炉に転用される事例も多く、本遺跡でもその傾向と一致した出土状況を示している。土師器坏には被熱して煤や自然釉状の付着物を残すものがあり、これらは灯明具として用いられたものと考えられる。竪穴住居1出土の49は口縁部をユビオサエにより注口状に成形したものだが、これにも自然釉状の付着物が認められる。須恵器には低い器高で端部がわずかに返りを持つ蓋、断面方形あるいは台形の高台を持ち、坏部形態が低い台形を

呈する坏等がある。いずれもこの時期にみられる典型的な供膳具といえる。また、図化に耐えるものはわずかであったが、堅穴住居の埋土中に多量の布痕土器の碎片が含まれていた。住居廃棄の際に埋土と共に埋め込まれたものであろう。この布痕土器は被熱痕をもつものが大半であり、中には自然釉状の付着物を残すものもある。その他に特徴的なものとしては、堅穴住居 1 出土の胴部と底部に焼成後穿孔を施した丸底壺がある。住居廃棄に伴う祭祀行為で用いられたものであろうか。

鉄製品に関しては、堅穴住居 1 の床面から鎌、紡錘車が、堅穴住居 28 から刀子、不明棒状鉄製品が、堅穴住居 29 から刀子が出土している。不明棒状鉄製品には横方向の繊維状の付着物がわずかに認められることから、紡錘車の軸か、あるいは糸紡ぎに関わる道具と推測される。紡錘車と共に本遺跡で糸紡ぎに関する作業が行われたことを示唆する遺物である。

堅穴住居群の廃絶後に造営された周溝墓 1 は、いまだ不明瞭な宮崎平野部における古代墓制を考える上での貴重な事例となった。墓坑から出土した副葬品と考えられる黑色土器 B 類碗(271)は、形態的特徴から森隆の九州系Ⅱ類に分類される。また、周溝内に投げ込まれたように出土した土師器坏はいずれも口径 10cm 前後、器高 2.5cm 前後で統一されており製作技法上で類似性の高い一群である。これらは堀田孝博の土師器坏 A1 類に分類できる。周溝墓に伴う祭祀行為によるものと考えられ、墓坑の黑色土器 B 類碗と共に時期を判断する材料となり得る遺物である。その他の周溝出土遺物は、破片資料が多い上に埋土中からの出土であるため混入の可能性が高いといえよう。周溝埋没時に混入したか、あるいは墳丘盛土内に含まれていたものが流れ込んだと推測される。本遺跡の周溝墓は黑色土器 B 類碗と土師器坏 A1 類の年代から 10 世紀中葉～後葉に造営されたものと考えられる。本遺跡では 1 基のみ単独で検出されたが、調査区外にも墓域が広がる可能性がある。

溝状遺構については、A 区で方形区画を意識したかのような配置のものが検出されている。溝状遺構 6、7 と溝状遺構 8、9 であり、両者とも少し位置をずらしてほぼ同じ方向に走っているのが特徴的である。ただしこれらの溝は埋土の特徴が異なるため同時期の所産ではなく、溝状遺構 6、7 (古)→溝状遺構 8、9 (新)という先後関係にある。溝内からは遺物の出土が少なく時期比定が難しいが、溝状遺構 6 から糸切り底の土師器坏が出土していることから中世の溝である可能性が考えられる。

多数検出された柱穴群については、平面分布を検討したところ掘立柱建物を形成するものはみられなかった。遺物がほとんど出土せず時期が不明な柱穴が多いが、A 区では一部に古墳時代のものが含まれている。堅穴住居内で柱穴が検出されなかったことから、一部に堅穴住居に伴うものが含まれる可能性があるが、調査では明らかにすることができなかった。

最後に古代の下北方遺跡群における花切第 2 遺跡の位置付けについて述べておきたい。本遺跡は後世に大規模な造成がなされていたこともあり、検出された遺構は本来の集落の一部にすぎないと考えられる。削平されていたため調査対象とならなかった A 区と B 区の間部分にも集落が広がっていたと想定すべきであろう。下北方遺跡群における同時期の集落としては、本遺跡から約 350m 南東に位置する下郷第 4 遺跡が挙げられる。8 世紀前半～9 世紀後半の堅穴住居 11 軒と掘立柱建物 2 棟、方形に廻ると考えられる溝状遺構 1 条が検出されており、出土遺物にはコップ形須恵器や古代瓦といった官衙的性格をうかがわせるものがみられる。本遺跡

第4節 古代以降について

ではこうした官衙的性格をうかがわせる遺構、遺物はみられないものの、竪穴住居が短期間のうちに頻繁に建替えられていることから、下北方遺跡群の中でも中心的な集落か、あるいはそれに近い集落であったと考えられる。9世紀後半になると、本遺跡から200m南に位置する塚原第2遺跡で寺院あるいは役所と思われる掘立柱建物が出現する。また塚原第2遺跡より南に位置する下北方1号墳周辺遺跡、5号墳周辺遺跡でも古代瓦の出土がみられ、この時期には塚原第2遺跡の寺院あるいは役所を中心とした集落が丘陵上に広がっていたと推測される。しかし、花切第2遺跡ではこの時期の遺構はみられず、集落は別の場所に移動したものとみられる。さらに時期が下って10世紀中葉～後葉になると、花切第2遺跡周辺は墓域として利用されるようになり、周溝墓1が造営される。下北方遺跡群ではこの時期の遺構、遺物はほとんど検出されていないが、この周溝墓を造営した集落が花切第2遺跡の周辺に存在する可能性がある。今後、この周溝墓の被葬者像を含めて、宮崎平野部における古代墓制の様相を明らかにしていく必要があるだろう。

参考文献

- 秋成雅博 2014「宮崎県の遺跡群」『九州旧石器』第18号 九州旧石器文化研究会
- 今塩屋毅行 2014「古代の豊前・豊後系土師器-「全球型甕」の軌跡-」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究-東九州道調査以後の新地平-』平成26年度宮崎考古学会研究会発表要旨 宮崎考古学会
- 大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V
- 竹中克繁 2010「日向国における古代土器の変遷-宮崎平野部の須恵器・土師器碗編年-」『先史学・考古学論究』V 龍田考古会
- 豊島直博 2010『研究論集16 鉄製武器の流通と初期国家形成』奈良文化財研究所学報第83集
- 西嶋剛広編 2010『下北方塚原第1遺跡』宮崎市文化財調査報告書第78集 宮崎市教育委員会
- 堀田孝博 2012「宮崎平野部における平安時代の土器について-土師器供膳具を中心として-」『宮崎考古』第23号 宮崎考古学会
- 森下章司 2002「古墳時代倭鏡」『考古資料大観 弥生・古墳時代鏡』第5巻 小学館
- 森 隆 1990「西日本の黒色土器生産(中)」『考古学研究』第37巻第3号 考古学研究会
- 宮崎県旧石器文化談話会 2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66 旧石器文化談話会